

研究ノート

大学野球におけるスカウト時のポイントに関する研究

古 葉 隆 明
上 代 圭 子

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第7号 抜刷
2022年（令和4年）3月20日

研究ノート

大学野球におけるスカウト時のポイントに関する研究

古 葉 隆 明
上 代 圭 子

A study of Scouting Point in University Baseball

KOBA, Takaaki
JODAI, Keiko

Abstract

The purpose of this study is to focus on the “scout”, which is the starting point of a professional sports career, clarify the difference in consciousness between the players being recruited and the hiring staff on the scouting side, and present its significance for college baseball. In order to achieve this goal, this paper seeks to clarify (1) the points that professional baseball player recruiters place importance on when scouting; (2) the attitudes of college baseball players when scouting; and (3) three sub-purposes to identify the important points for student baseball players to become professionals.

As a result, the scouts of professional baseball teams think that older players, such as college students and adult players, are more developed and ready to play. The important points for the scout staff were future potential, physique, age, individual athlete’s performance and injury history, and physical measurements. Regarding grades, physical measurements, and physique, the scouting staff and the university students being scouted have the same beliefs. However, while the scouting staff regards college students as players who have developed to some extent and value their character, they also believe that their thinking ability is still not high.

On the other hand, since the scout staff thinks that high school students are still developing as players, it is thought that the university will be a place to develop their character as well as abilities.

Key Words: University Baseball, Scouting, Professional Baseball player

目 次

1. 序論
2. 研究方法と手順
 - 2.1 調査方法
 - 2.2 調査対象
 - 2.3 調査手順
 - 2.4 調査項目
 - 2.5 分析方法
3. 結果
 - 3.1 サンプルの属性
 - 3.2 スカウトの意識
 - 3.2.1 スカウトをする際に重要視する点
 - 3.2.2 前所属チームによる比較
 - 3.3 大学生の意識
 - 3.3.1 スカウトをする際に重要視される点についての大学生の認識
 - 3.3.2 スカウト時の学生の認識の学年による比較
 - 3.3.3 スカウト時の学生の認識のカテゴリーによる比較
 - 3.4 スカウト担当者と学生の認識の違い
 - 3.5 スカウト時の重要な他者
4. まとめ

1. 序 論

日本野球機構（2021）によると、2020年に戦力外・現役引退となった選手は、外国人選手や同一球団内で育成選手再契約締結選手を除く133人であり、平均引退年齢は28.1歳、平均在籍期間7.7年と、直近の5年間で、最も短くなっている。だが、小学生の夢の職業の1つであり、2020年度も、サッカー選手・監督に次いで、野球選手・監督は2位になっていた（日本FP協会）。

このように、日本においては、数多くあるスポーツの中でも、野球はとて人気があるスポーツなのである。そしてこの人気はトップレベルのプロ野球だけではなく、高校野球や大学野球など、各年代の大会も人気がある。特に「甲子園」「高校野球」と呼ばれる高校生の大会の「全国高校野球選手権」は、全試合がテレビ中継され、新聞各紙やスポーツニュースでの扱いも大きい。今や全国高校野球選手権は、夏の風物詩といっても過言ではないスポーツイベントとなっている。だが、大学野球も、根強い人気を誇っている。特に東京六大学野球リーグは、プロ野球で王選手や長嶋選手が活躍するまでは、野球を牽引してきた。今では、全日本大学野球連盟には全国で26ものリーグが登録しており、毎年6月には全日本大学野球選手権が開催され、多くのファンが観戦している。そして、この全国高校野球選手権と全日本大学野球選手権には、ファンだけではなくプロ野球のスカウト担当者も数多く訪れている。

プロ野球選手になるためには、「プロ野球ドラフト会議」で球団から指名を受ける必要があり、プロサッカーと異なり、このドラフトにかかるとプロ野球選手になることはできない。そして、このドラフトにかかるためには、各球団のスカウト担当者の目に留まらなければならないのである。大学リーグでプレーする選手の中にも、将来プロ野球選手になりたいと考えている選手も少なくない。だが、前田ら（2017）によると、スカウト担当者と学生の考えには差異があること

が明らかになっている。

アスリートのキャリアプロセスに関する研究は1980年代より海外において急激に増え、日本においても1990年代から注目されるようになった。そして、生徒や学生などを対象とした研究も1990年代から始まり、高校生を対象とした研究（岩島・濱田, 1993；吉田ら, 1996；山本ら, 1999；飯田, 2012；栗山, 2012）が複数行われ、大学生を対象とした研究（吉田ら, 1999；清水ら, 2010；清水・島本, 2011；生方ら, 2011；木内ら, 2013；八田ら, 2012；清水・島本, 2014；古谷・栗木, 2015；山本ら, 2016；前田ら, 2017；山本・島本, 2019）も2010年あたりから散見されるようになってきている。だが、「スカウト」に着目した研究や、選手を「取る」側の視点に立ったものはほとんどなく、阿部（1994）の中学生の高校進学の際のスカウトに関する研究、上代ら（2016）の高校生の大学スポーツスカウトに関する研究、前田ら（2017）の大学生サッカー選手とプロサッカークラブのスカウトの意識の差異を明らかにした研究など、数点しか見受けられない。したがって、プロ野球のスカウトに着目した研究は日本においては無いと言っても過言ではない。

そこで本研究では、プロスポーツキャリアの出発点となる「スカウト」に着目し、スカウトされる側の選手とスカウトする側の選手採用担当者の意識の違いを明らかにし、大学野球の意義を提示することを目的とする。そして、本目的を達成するために、下記3点の副目的を設定する。

- ①プロ野球の選手採用担当者がスカウトの際に重要視する点を明らかにする。
- ②大学生野球選手のスカウト時の意識を明らかにする。
- ③大学生野球選手がプロになるために重要な点を明らかにする。

2. 研究方法と手順

2.1 調査方法

本調査は、①スカウトを行う側である日本プロ野球機構に所属する球団を対象とした調査と、②スカウトをされる側である大学生を対象とした調査の2種類で行った。なお、両調査ともにインターネットを使用したアンケート調査（Google Form使用）にて行っている。

2.2 調査対象

①プロ野球の球団を対象とした調査は、日本プロ野球機構に所属する12球団の選手採用担当者を対象とした。有効回答数は13であった。

また、②大学生を対象とした調査は、全国大会に出場歴のある5大学の硬式野球部に所属する学生549名を対象としたが、有効回答数は328である。なお、これらの大学生を対象とした理由は、全国大会に出場歴がある強豪校であり、プロ野球に進む可能性があるからである。

2.3 調査手順

本調査は、①プロ野球の球団を対象とした調査、②大学生を対象とした調査ともに、2021年10月に実施した。

①プロ野球の球団を対象とした調査の際には、まず強化担当者にメールで本研究の調査目的と内容を説明し、協力を求めた。その後、アンケート調査用のURLをメールにて送付して、インターネット上で回答してもらった。

②大学生を対象とした調査は、メールにて指導者に本研究の調査目的と内容を説明した。そして調査協力を得た指導者宛にアンケート用のURLをメールにて送付し、指導者やマネージャーか

ら本調査の説明をしてもらおうとともに、URLを対象者に転送してもらい、インターネット上で回答してもらった。

2.4 調査項目

調査項目であるが、①プロ野球の球団を対象とした調査は、個人的属性（年齢、役職、担当期間）、スカウト活動をする際に重要視する項目（12項目）、選手の特徴（大学生選手、高校生選手、社会人選手、各14項目）、選手をスカウトする際の重要な他者、解雇するまでの年数（大学出身選手、高校出身選手、社会人出身選手）、スカウトをする際のポイントとした。また、②大学生を対象とした調査は、個人的属性（学年、所属カテゴリー、高校時代の所属チーム、野球暦）、プロ野球の球団のスカウトがスカウト活動をする際に重要視していると思う項目（12項目）、自分の特徴（14項目）、進路を決定する際の重要な他者とした。

質問項目は、「大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究」（上代ら、2016）の研究知見および、「地域タレント発掘・育成事業に対する協力ガイドライン」（日本オリンピック委員会、2008）を基に作成された「大学サッカーにおけるスカウト時のポイントに関する研究」（前田ら、2016）で使用した質問項目を引用し、プロ野球の球団のスカウト経験者や大学野球の指導者ら有識者によって質問項目の妥当性を検討した。

なお、スカウト活動をする際に重要視する項目（12項目）、プロ野球の球団のスカウトがスカウト活動をする際に重要視していると思う項目（12項目）は同じ項目とし、「とても重要視する」から「全く重要視しない」、の6段階尺度とし、選手の特徴（各選手14項目）、自分の特徴（14項目）は同じ項目とし、「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の6段階尺度とした。また、進路決定における重要な他者は10項目からの複数選択とし、その他は自由記述としている。

2.5 分析方法

分析は、SPSS Statistics 20を使用し、単純集計、クロス集計およびt検定、f検定を行った。

3. 結果

3.1 サンプルの属性

プロ野球の球団を対象とした調査における回答者の属性であるが、役職は、GMが7.7%、強化スカウト担当者が92.3%であった（表1）。

また、回答者の平均年齢は47.25歳であり、担当期間は平均11.62年であった。

次に、大学生を対象とした調査における回答者の属性である（表2）。

まず学年は、1年生が32.0%、2年生が28.7%、3年生が21.6%であり、4年生が17.4%、無回答

表1 プロ野球の球団を対象とした調査回答者の属性

		%	(n)
役職	GM	7.7 %	(1)
	スカウト担当者	92.3 %	(12)
	合計	100.0 %	(13)

表2 学生を対象とした調査回答者の属性

		%	(n)
学年	1年生	32.0 %	(105)
	2年生	28.7 %	(94)
	3年生	21.6 %	(71)
	4年生	17.4 %	(57)
	無回答	0.3 %	(1)
	合計	100.0 %	(328)
所属 カテゴリー	Aチーム	30.2 %	(99)
	Bチーム	46.0 %	(151)
	Cチーム	2.7 %	(9)
	Dチーム	5.5 %	(18)
	スタッフ	8.5 %	(28)
	その他	3.4 %	(11)
	無回答	3.7 %	(12)
合計	100.0 %	(328)	
高校時代の 所属チーム	硬式野球	99.1 %	(325)
	軟式野球	0.3 %	(1)
	無回答	0.6 %	(2)
	合計	100.0 %	(328)

が0.3%であった。

所属チームのカテゴリーに関しては、Aチームの選手が30.2%であり、Bチームの選手が46.0%、Cチームが2.7%、Dチームが5.5%であり、学生コーチなどの指導側のスタッフが8.5%、その他（マネージャーなどプレーをしない者）が3.4%、そして無回答が3.7%であった。

そして、高校時代の所属チームは、硬式野球を行っていた選手が99.1%とほとんどであり、軟式野球を行っていた選手が0.3%、無回答の選手が0.6%である。

なお、野球歴は、平均12.63年であった。

3.2 スカウトの意識

3.2.1 スカウトをする際に重要視する点

選手をスカウトする際に重要視するポイントを、6段階尺度で回答してもらった（図1）。

将来性が最もポイントが高く（5.62）、次いで体格（5.08）、年齢（4.69）、選手個人の成績と傷害歴（4.46）、フィジカル測定値（4.31）となっており、選手の状態についての項目が高かった。逆に、出身地（2.54）は低くなっていた。昨今、日本のプロ野球もJリーグに倣って球団の置かれている地域の名前をつけるなど地域を意識するようになってきているが、選手の出身地域はあまり気にせず、

地元の選手を取るということはあまりないようである。

3.2.2 前所属チームによる比較

次に、属性による違いを明らかにするために、「大学：大学の部活動のチームに所属する選手」「高校：高校の部活動のチームに所属する選手」「社会人：社会人チームに所属する選手」として、プロになる直前の所属チームごとにイメージを聞いた（図2、表3）。

その結果、大学生は「球団のことを理解している（4.77）」「将来性がある（4.23）」「チームリーダーとなれる（4.38）」「将来の球団スタッフになれる（4.62）」「プライベートの心配がない（4.08）」

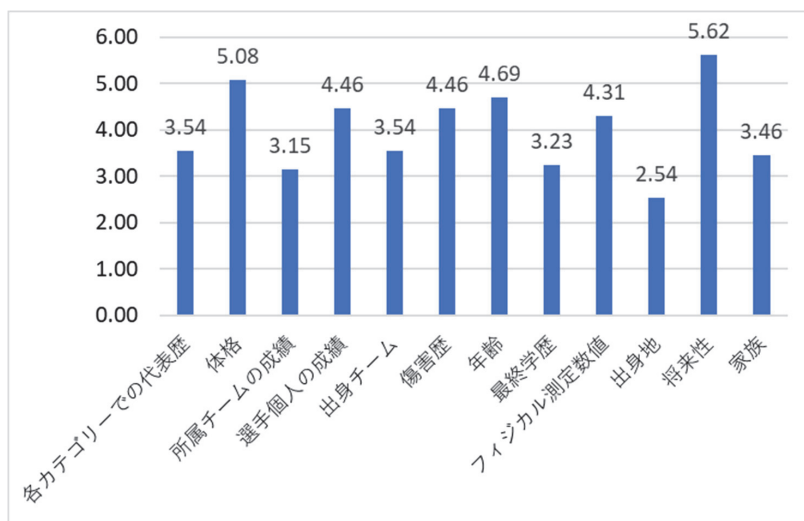


図1 スカウトする際に重要視する点

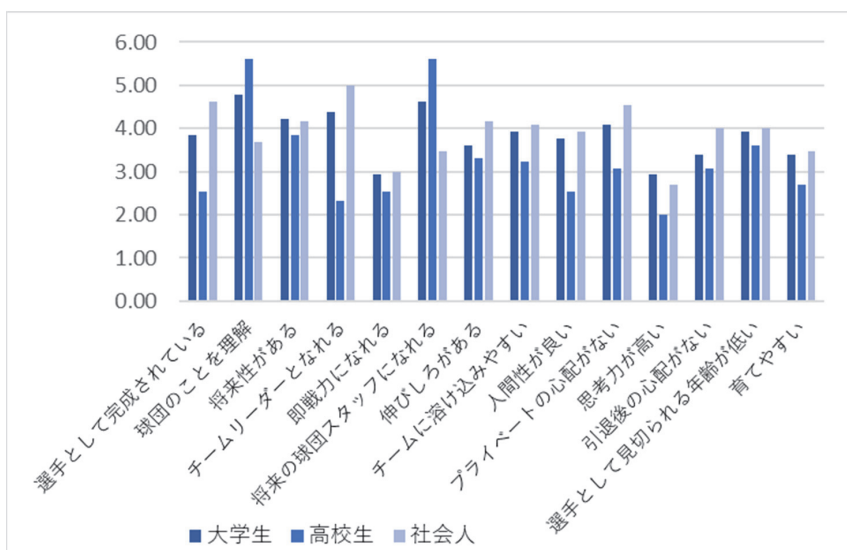


図2 選手のイメージ（所属チームによる違い）

表3 選手のイメージ（所属チームによる違い）

	大学生	高校生	社会人
選手として完成されている	3.85	2.54	4.62
球団のことを理解している	4.77	5.62	3.69
将来性がある	4.23	3.85	4.15
チームリーダーとなれる	4.38	2.31	5.00
即戦力になれる	2.92	2.54	3.00
将来の球団スタッフになれる	4.62	5.62	3.46
伸びしろがある	3.62	3.31	4.15
チームに溶け込みやすい	3.92	3.23	4.08
人間性が良い	3.77	2.54	3.92
プライベートの心配がない	4.08	3.08	4.54
思考力が高い	2.92	2.00	2.69
引退後の心配が少ない	3.38	3.08	4.00
選手として見切られる年齢が低い	3.92	3.62	4.00
育てやすい	3.38	2.69	3.46

が、4ポイント以上と高くなっていった。次に高校生は、「球団のことを理解している」「将来の球団スタッフになれる」がそれぞれ5.62ポイントと高くなっていった。そして社会人の選手は、「選手として完成されている（4.62）」「将来性がある（4.15）」「チームリーダーとなれる（5.00）」「伸びしろがある（4.15）」「チームに溶け込みやすい（4.08）」「プライベートの心配がない（4.54）」「引退後の心配がない（4.00）」「選手として見切られる年齢が低い（4.00）」が高くなっていった。

したがって、全体として社会人や大学生の方がポイントが高く、年齢が高くなると完成されて即戦力になると思われているようである。つまり、年齢があがるとその時点で完成されていることが求められているようである。

この傾向は、新人として獲得した選手を解雇するまでに様子を見る年数について聞いた結果、大学生の選手が平均3.92年、高校生の選手が平均4.77年、社会人の選手が平均3.69年であったことから伺える。

3.3 大学生の意識

3.3.1 スカウトをする際に重要視される点についての大学生の認識

スカウトをする際に重要視される点について、大学生の認識は図3の通りである。

将来性が5.67ポイントと最も高く、学生はスカウトするには将来性が重要視されると考えている。他にも、選手個人の成績（5.59）、体格（5.09）、フィジカル測定値（5.02）が高くなっていった。なお、この成績については、数字に出るものだけでなく、「活躍して目立つ」といった意味を含んでいると思われる。一方で、出身地（2.13）や家族（2.71）は低くなっていった。

次に、プロ野球のスカウト担当者が選手を取る際に考慮する点について、大学生自身の認識を聞いた（図4）。

その結果、「プライベートの心配がない（4.59）」が最も高く、次いで「人間性が良い（4.25）」、「チームに溶け込みやすい」と「思考力が高い」がそれぞれ4.17ポイント、「伸びしろがある」が

4.11ポイントと高くなっていた。したがって学生は、自分のことを「プライベートの心配がなく人間性が良い、またチームに溶け込みやすく思考力が高いとして、人間としての魅力があると感じているとともに、伸びしろがあるとしてプロになってからも成長する」と思っている。スポーツ選手はスポーツから離れたがらない (Drahota & Eitzen, 1998; 上代, 1999, 2005, 2013) とされているが、自分はまだ成長すると考えていることも要因のひとつかもしれない。

一方で、「選手として完成されている (2.34)」「将来の球団スタッフになれる (2.50)」「即戦力になれる (2.59)」は2ポイント台と低いことから、大学生の選手は、今はまだ成長の途中だと考

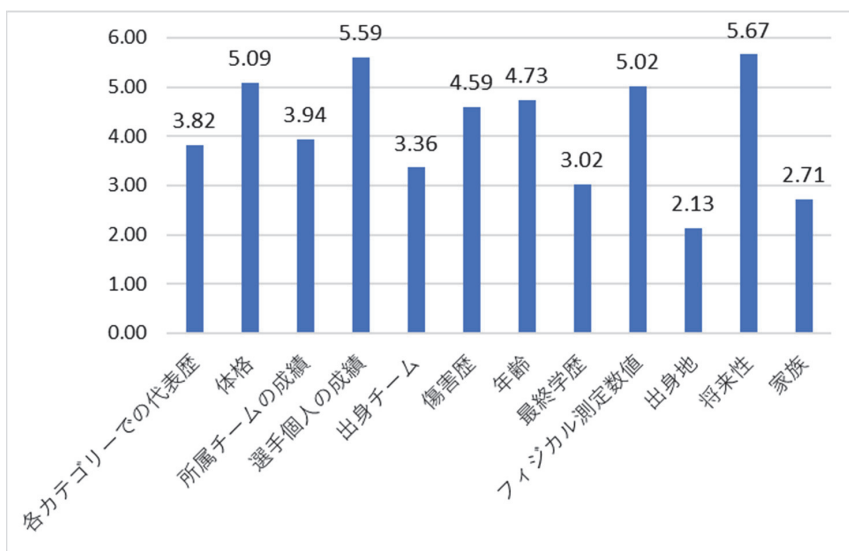


図3 スカウトする際に重要視される点についての大学生の認識

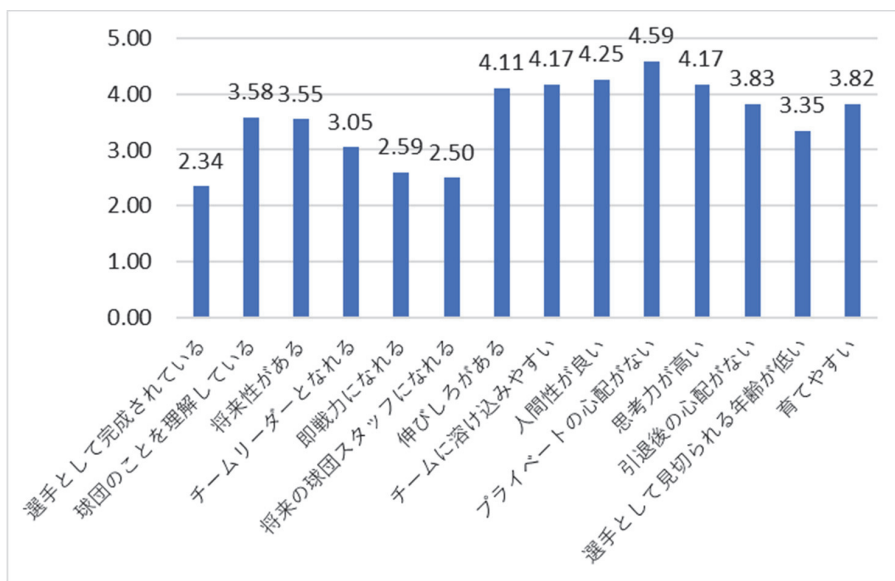


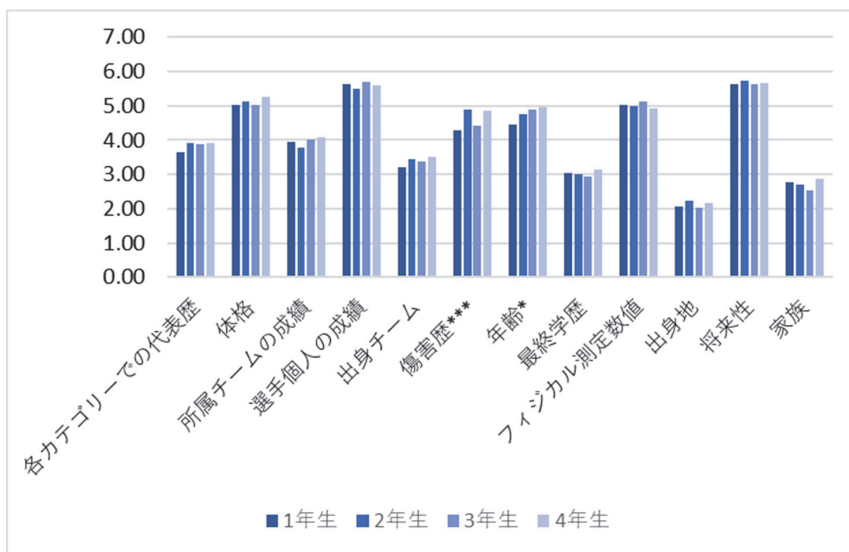
図4 スカウトする際に考慮されるポイントに対する学生の自己認識

えているようである。

3.3.2 スカウト時の学生の認識の学年による比較

次いで、図5、表4の通り、学年で比較したところ、学年による違いはあまり見られなかった。

その中で、傷害暦については、1年生4.30、2年生4.87、3年生4.41、4年生4.86となっており、2年生と4年生が高くなっていた。また年齢についても、1年生4.46、2年生4.77、3年生4.90、4年生4.95となっており、学年が上がるに連れて年齢がスカウト時には重要視されると思っているようである。これは、自分には伸びしろがありプロになってからも成長すると思っている反面、先輩が



***p>0.001, *p>0.05

図5 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識 (学年比)

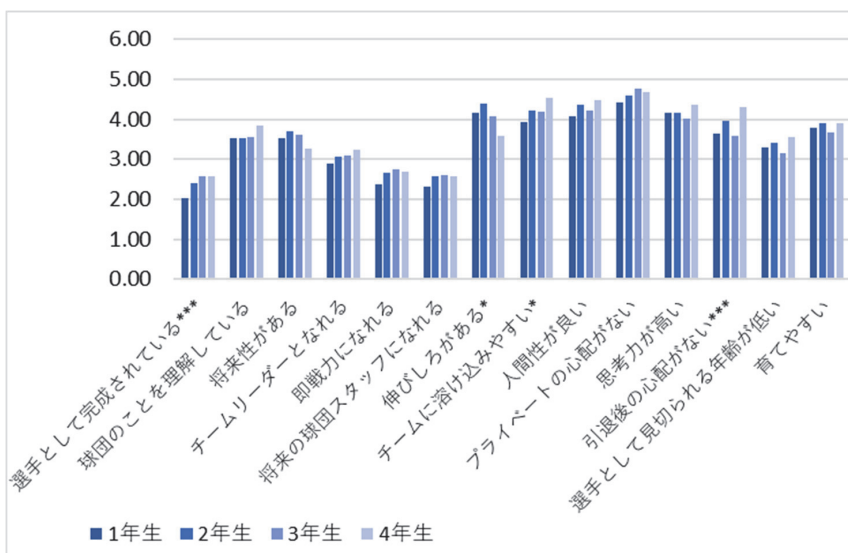
表4 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識 (学年比)

	1年生	2年生	3年生	4年生
各カテゴリーでの代表暦	3.64	3.91	3.87	3.91
体格	5.01	5.12	5.01	5.26
所属チームの成績	3.94	3.78	4.01	4.09
選手個人の成績	5.63	5.48	5.69	5.60
出身チーム	3.22	3.45	3.36	3.49
傷害暦***	4.30	4.87	4.41	4.86
年齢*	4.46	4.77	4.90	4.95
最終学歴	3.03	3.00	2.93	3.14
フィジカル測定数値	5.03	5.00	5.13	4.91
出身地	2.07	2.24	2.03	2.16
将来性	5.64	5.73	5.63	5.65
家族構成	2.76	2.69	2.54	2.88

***p>0.001, *p>0.05

プロ野球選手になれない現実直面するためだと考えられる。

また、学生のスカウトする際に考慮されるポイントについても学年別に比べた結果、どの項目も学年が上がるごとに自己認識は強くなっていたが、有意差はなかったことから、自己認識に関して学年による差異はないと考えられる（図6、表5）。



***p>0.001, *p>0.05

図6 スカウトする際に考慮されるポイントに対する学生の自己認識（学年比）

表5 スカウトする際に考慮されるポイントに対する学生の自己認識（学年比）

	1年生	2年生	3年生	4年生
選手として完成されている***	2.02	2.40	2.57	2.58
球団のことを理解している	3.52	3.52	3.56	3.84
将来性がある	3.52	3.70	3.61	3.26
チームリーダーとなれる	2.90	3.06	3.10	3.23
即戦力になれる	2.37	2.66	2.74	2.70
将来の球団スタッフになれる	2.31	2.57	2.60	2.58
伸びしろがある*	4.17	4.38	4.09	3.58
チームに溶け込みやすい*	3.92	4.20	4.20	4.54
人間性が良い	4.07	4.35	4.21	4.47
プライベートの心配がない	4.43	4.59	4.77	4.67
思考力が高い	4.16	4.16	4.03	4.37
引退後の心配が少ない***	3.63	3.95	3.59	4.30
選手として見切られる年齢が低い	3.30	3.42	3.16	3.54
育てやすい	3.78	3.90	3.68	3.91

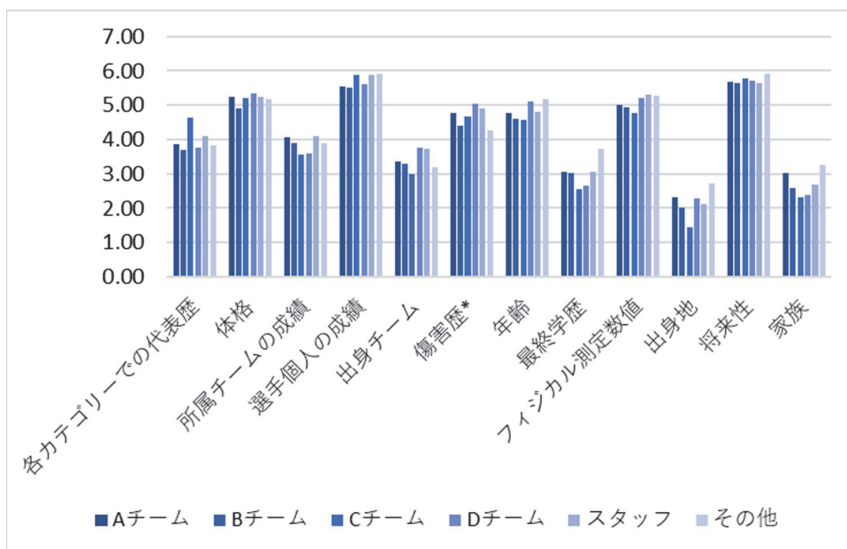
***p>0.001, *p>0.05

3.3.3 スカウト時の学生の認識のカテゴリーによる比較

次に、所属するカテゴリーによる比較を行った（図7、表6）。

スカウトする際に重要視される点について所属するカテゴリーによって比較をしたところ、有意差が見られたのは傷害歴のみであり、Aチーム4.77、Bチーム4.39、Cチーム4.67、Dチーム5.06、スタッフ4.89、その他4.27となっており、最もDチームが高くなっていた。

そして、AチームとBチームの人数が多かったことから、この2チームのみでみたところ、全体的にAチームの方が高くなっており、上位チームに所属する選手の方が様々な項目がスカウト時



*p>0.05

図7 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識（所属リーグ比）

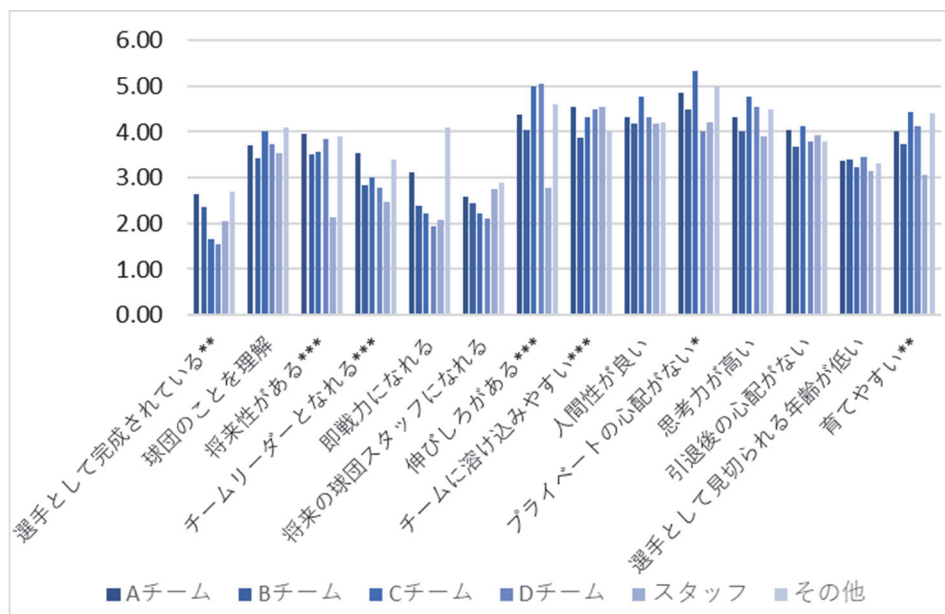
表6 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識（所属リーグ比）

	Aチーム	Bチーム	Cチーム	Dチーム	スタッフ	その他
各カテゴリーでの代表歴	3.88	3.70	4.63	3.78	4.11	3.82
体格	5.23	4.91	5.22	5.33	5.25	5.18
所属チームの成績	4.05	3.90	3.56	3.61	4.11	3.91
選手個人の成績	5.55	5.52	5.89	5.61	5.89	5.91
出身チーム	3.36	3.29	3.00	3.78	3.71	3.18
傷害歴*	4.77	4.39	4.67	5.06	4.89	4.27
年齢	4.77	4.61	4.56	5.11	4.82	5.18
最終学歴	3.06	3.01	2.56	2.67	3.07	3.73
フィジカル測定数値	5.01	4.94	4.78	5.22	5.32	5.27
出身地	2.33	2.01	1.44	2.28	2.11	2.73
将来性	5.67	5.65	5.78	5.72	5.64	5.91
家族構成	3.01	2.57	2.33	2.39	2.68	3.27

*p>0.05

に重要視されていると考えているのかもしれない。

また、スカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識についても所属するカテゴリによる比較を行った結果 (図8, 表7), 「選手として完成されている」はAチーム2.63, Bチーム



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図8 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識 (所属チーム比)

表7 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識 (所属チーム比)

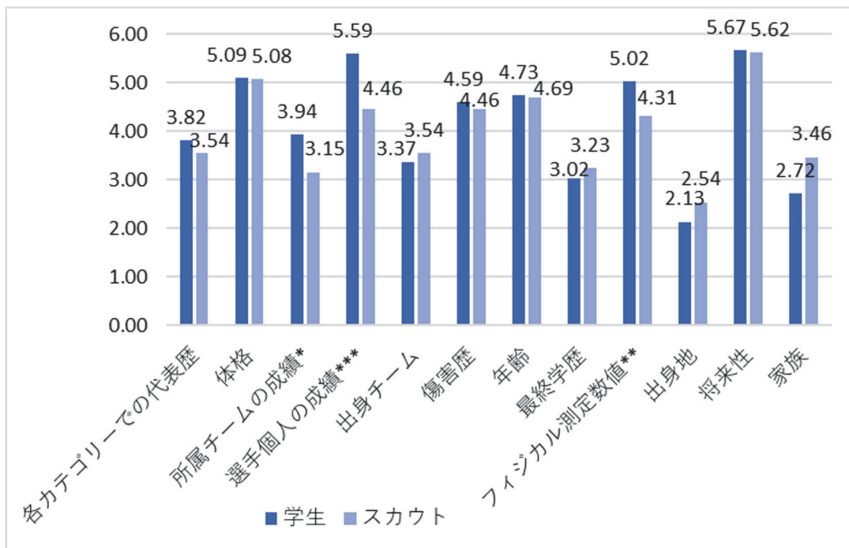
	Aチーム	Bチーム	Cチーム	Dチーム	スタッフ	その他
選手として完成されている**	2.63	2.35	1.67	1.56	2.04	2.70
球団のことを理解している	3.70	3.43	4.00	3.72	3.54	4.10
将来性がある***	3.97	3.52	3.56	3.83	2.14	3.90
チームリーダーとなれる***	3.54	2.85	3.00	2.78	2.46	3.40
即戦力になれる	3.12	2.39	2.22	1.94	2.07	4.10
将来の球団スタッフになれる	2.60	2.43	2.22	2.11	2.75	2.90
伸びしろがある***	4.38	4.04	5.00	5.06	2.79	4.60
チームに溶け込みやすい***	4.54	3.88	4.33	4.50	4.54	4.00
人間性が良い	4.31	4.19	4.78	4.33	4.18	4.20
プライベートの心配がない*	4.86	4.49	5.33	4.00	4.21	5.00
思考力が高い	4.33	4.01	4.78	4.56	3.89	4.50
引退後の心配が少ない	4.04	3.67	4.11	3.78	3.93	3.80
選手として見切られる年齢が低い	3.37	3.40	3.22	3.44	3.14	3.30
育てやすい**	4.00	3.74	4.44	4.11	3.07	4.40

***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

2.35, Cチーム1.67, Dチーム1.56, スタッフ2.04, その他2.70となっており, 選手と比較すると上位チームに所属する選手ほど, 選手として完成していると思っているようである。また, 「将来性がある」については, Aチーム3.97, Bチーム3.52, Cチーム3.56, Dチーム3.83, スタッフ2.14, その他3.90となっており, AチームとDチームの選手が将来性があると思っているようである。そして, 「チームリーダーとなれる」かについては, Aチーム3.54, Bチーム2.85, Cチーム3.00, Dチーム2.78, スタッフ2.46, その他3.40となっており, 最もAチームの選手がリーダーとなれると思っているようである。「伸びしろがある」かについては, Aチーム4.38, Bチーム4.04, Cチーム5.00, Dチーム5.06, スタッフ2.79, その他4.60となっており, 下位チームの方が伸びしろがあると思っている。また, 「チームに溶け込みやすい」かについては, Bチームが低くなっており, (Aチーム4.54, Bチーム3.88, Cチーム4.33, Dチーム4.50, スタッフ4.54, その他4.00), 「プライベートの心配がない」かについては, Cチームが高くなっていた (Aチーム4.86, Bチーム4.49, Cチーム5.33, Dチーム4.00, スタッフ4.21, その他5.00)。逆に, 「育てやすい」かについては, Bチームが低くなっている (Aチーム4.00, Bチーム3.74, Cチーム4.44, Dチーム4.11, スタッフ3.07, その他4.40)。この点について, パレーボールの日本代表監督も務めた柳本氏は, トップアスリートに必要な資質として, 素直さを挙げている。「そういう姿勢でないと, あんなに真つすぐ頂点を狙いには行けない。」「トップアスリートは10年経っても乾いた砂に水がスーッと入るように『はい』と言える。何の曇りもなく, とにかく素直ですよ。」(スポーツコミュニケーションズHP 2016年8月4日版)と言っていることから, トップチームではないBチームの選手は「素直ではない=育てにくい」と選手自身も感じているのかもしれない。

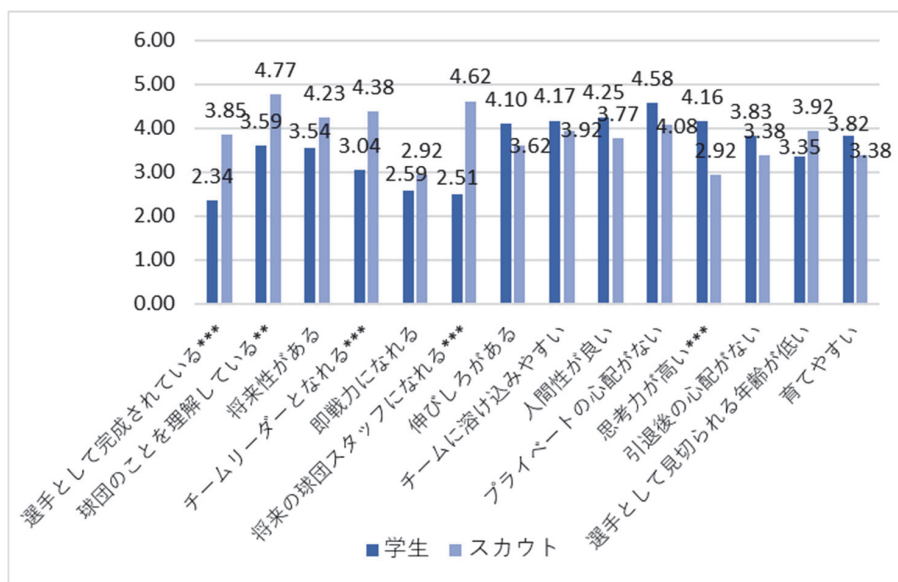
3.4 スカウト担当者と学生の認識の違い

スカウトする際に重要視される点についてのスカウトと学生の認識の違いを分析した (図9)。その結果, 所属チームの成績 (学生3.94, スカウト3.15), 選手個人の成績 (学生5.59, スカウ



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図9 スカウトする際に重要視される点についてのスカウトと学生の認識の違い



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図10 スカウトのイメージと学生の自己認識の差

ト4.46), フィジカル測定値(学生5.02, スカウト4.31)については, スカウトよりも学生の方が高くなっていました。したがって, 学生が思っているほど, 成績やフィジカル測定値は重要視していなかった。

次に, スカウトのイメージと学生の自己認識の差について分析したところ, 図10のように, 「選手として完成されている」(学生2.34, スカウト3.85), 「球団のことを理解している」(学生3.59, スカウト4.77), 「チームリーダーとなれる」(学生3.04, スカウト4.38), 「将来の球団スタッフになれる」(学生2.51, スカウト4.62), 「伸びしろがある」(学生2.92, スカウト4.10)について, 有意差が見られた。思考力以外の項目については, スカウトの方が高くなっていったことから, スカウトは大学生をある程度完成された選手だと考えており, 人間性についての評価もしているようであり, この点について選手は理解した方が良いと思われる。一方で, 思考力については, 学生は自分の思考力は高いと考えている一方で, スカウトはそのようには考えていないようである。

3.5 スカウト時の重要な他者

最後に, スカウト時に相談するような重要な他者は誰かと聞いたところ, 学生にとって重要な他者となる人は, 多くが両親(83.5%)であった。他には, 学校やクラブの指導者や先生(40.9%), 地域の人や指導者(22.6%)も相談する相手となるようである(図11)。

一方でスカウト担当者にとってのスカウト時の重要な他者は, 両親と学校やクラブの指導者や先生が78.6%と同率であり, 次いで学校の他の先生や監督(42.9%)となっていることから, スカウト担当者にとっては, 両親はもちろんのこと, 学校の先生や指導者も重要になるようである(図12)。

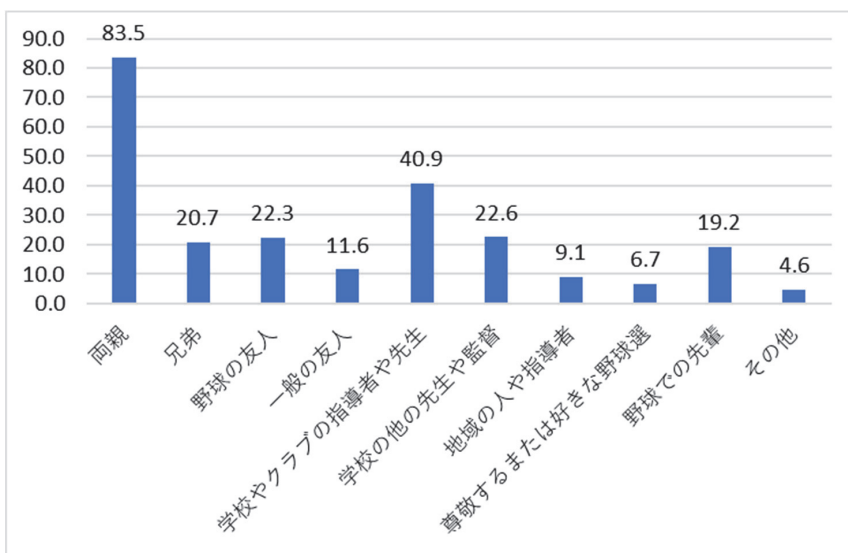


図 11 スカウト時の重要な他者（学生）

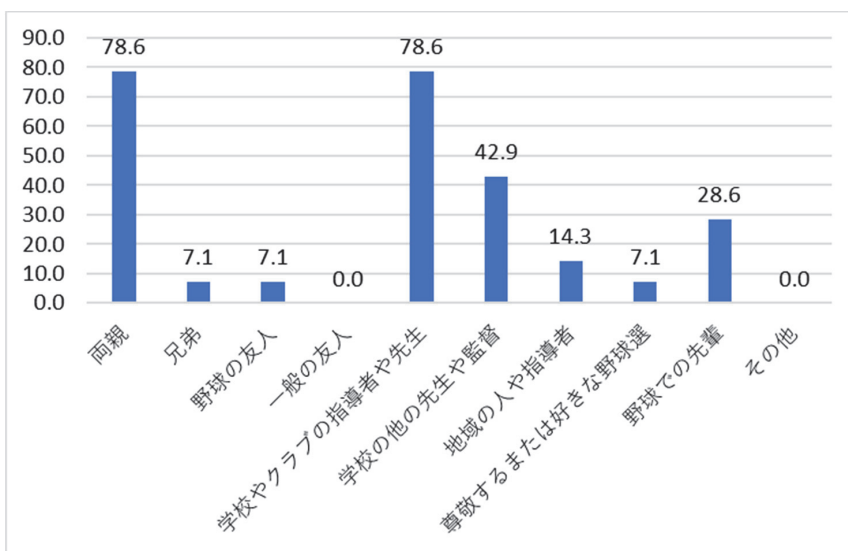


図 12 スカウト時の重要な他者（スカウト担当者）

4. まとめ

本研究の目的は、プロスポーツキャリアの出発点となる「スカウト」に着目し、スカウトされる側の選手とスカウトする側の選手採用担当者の意識の違いを明らかにし、大学野球の意義を提示することであった。

プロ野球の球団のスカウト担当者は、大学生や社会人の選手など年齢が高くなると完成されて

即戦力になると思っている一方で、高校生など年齢が低いほど将来性や伸びしろがあると思っている。スカウト担当者が重要視するポイントは、将来性や体格、年齢、選手個人の成績と傷害歴、フィジカル測定値であったことから、大学生は、スカウトされる時点で将来性があることは重要であるが、体格やフィジカル面についてはある程度完成させ、成績も残しておかないといけないと考えられる。

成績やフィジカル測定値は大学生の方がスカウトよりも重要だと考えている。また体格についても学生も重要だと考えていることから、スカウトする側の球団のスカウト担当者とスカウトされる側である大学生の意識は一致している。ただし、スカウト担当者は大学生をある程度完成された選手と捉え、人間性についての評価もしている一方で、思考力についてはまだまだ高くないと考えている。この点について、大学生の意識と差異があることから、学生はこの点を意識して改善していく必要があると考える。

一方で、高校生についてスカウト担当者は、まだ選手として完成されていないと考えていることから、大学は選手としての能力とともに人間性も成長させる場になると考えられ、大学野球で成長することでプロ野球で通用するような選手になることも可能なのではないだろうか。

参考文献

- ・阿部征次 (1994) 高校スポーツ指導者のスカウト活動. 東京女子体育大学紀要 29, 59-66.
- ・Drahota J. A. T., Eitzen, D. S. (1998) The role exit of professional athletes. *Sociology of Sports Journal*, 15, 263-278.
- ・Ebaugh, H. R. F. (1988) *Becoming an Ex, The process of role exit*. Chicago. University of Chicago Press.
- ・古谷 駿・栗木一博 (2015) デュアルキャリアに関する学生アスリートの意識と大学における支援の在り方についての研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, (16), 125-131.
- ・八田直紀・清水安夫・大後栄治 (2012) 大学生アスリートのライフスキル獲得に関する研究——コミットメント・情熱・ストレスとの関係性に着目した検討——. *学校メンタルヘルス*, 15 (2), 260-267.
- ・岩島孝夫・濱田幸二ほか (1993) 高校スポーツ選手の進路を決定する影響要因に関する研究——テニス選手とバレーボール選手を対象として——. *鹿屋体育大学学術研究紀要*, 10, pp. 35-41.
- ・飯田義明 (2012) Jクラブに所属するユース選手における進路決定プロセスに関する一考察. *専修大学体育研究紀要*, (36), 17-28.
- ・上代圭子 (1999) プロサッカー選手のセカンドキャリア. 順天堂大学卒業論文.
- ・上代圭子 (2005) プロサッカー選手のキャリアトランジションに関する研究——パラサイト化するJリーガー——. 順天堂大学大学院修士論文.
- ・上代圭子・野川春夫 (2013) 日本人元プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する研究——自主的な引退と非自主的な引退に着目して——. *生涯スポーツ学研究*, Vol. 9, No. 1・2, 19-31.
- ・上代圭子・田紀与美・三科真澄・城戸絵理沙・高木彩圭・古葉隆明 (2016) 大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究. *東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第1号*.
- ・木内敦詞・奈良雅之・島本好平 (2013) ラウンドテーブル 学生アスリートのキャリア支援を考える. *大学教育学会誌*, 35 (2), 61-65.
- ・久保田洋一・野川春夫・末永 尚・重野弘三郎 (2002) プロサッカー選手のセカンドキャリアチェンジ——役割卒業理論 (Role Exit Theory) を援用して——. *順天堂大学スポーツ健康科学研究*, 6, 106-116.
- ・栗山靖弘 (2012) スポーツ特待生の進路形成——高校球児の事例を通して——. *社会学ジャーナル*, 167-183.
- ・前田秀樹・後藤義一・上代圭子 (2017) 大学サッカーにおけるスカウト時のポイントに関する研究. *イベント学研究*, 2 (1), 37-47.
- ・文部科学省 (2016) 大学スポーツの振興に関する検討会議中間とりまとめ~大学のスポーツの価値の向上

に向けて～.

- ・重野弘三郎 (1999). プロサッカー選手のセカンドキャリア到達過程に関する研究——Role Exit Theoryに着目して——. 鹿屋体育大学修士論文.
- ・清水聖志人・中野恵介・松永修司・河野一郎 (2010) 大学トップアスリートのキャリアサポートに関する研究——レスリング競技者を対象として——. 運動とスポーツの科学, 16 (1), 35-39.
- ・清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. 日本体育大学紀要, 41 (1), 111-116.
- ・清水聖志人・島本好平 (2014) 大学トップアスリートにおけるキャリア教育プログラム作成に向けた縦断的検討. SSFスポーツ政策研究, 3 (1), 48-53.
- ・スポーツコミュニケーションズHP, 2016年8月4日. <https://www.ninomiyasports.com/archives/59544>
- ・竹野欽昭・伊集旭寿・岡野和輝・金城一樹 (2015) 大学スポーツ選手における過去を想起した心理的競技能力評価と妥当性の検討. 上越教育大学研究紀要, 34, 275-282.
- ・筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト編 (2007) トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのキャリア開発 (2) 基礎研究からカリキュラム開発へ, 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト.
- ・生方 謙・田中靖久・浜野 学 (2011) アスリート学生のキャリア選択: 体育会所属学生と一般学生の比較. 運動とスポーツの科学, 17(1), 123-128.
- ・山本教人・多々野秀雄・吉田 毅・三本松正敏・松尾哲矢 (1999) 高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向. 健康科学, 21, 29-39.
- ・山本浩二・島本好平・岡田龍司・岡崎祐史・中山忠彦・矢野裕介 (2016) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得とキャリア成熟との関連. 神戸医療福祉大学紀要, 17(1), 107-115.
- ・山本浩二・島本好平 (2019) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響. 体育学研究, 64 (1), 335-351.
- ・吉田 毅・中塚義実・倉田安治 (1996) 高校サッカー選手の進路選択に関する一考察——指導者の関与をめぐって——. 九州体育学研究, 第10巻, 第1号.
- ・吉田 毅・松尾哲矢・山本教人・谷口勇一 (1999) スポーツ選手のスポーツキャリア形成過程をめぐる日本の特徴: 第18回ユニバーシアード競技大会参加選手の国際比較調査から. 健康科学, 20, 63-76.